

會學濟經學大國帝都京

叢論經濟

號五第 卷十五第

月五年五十和昭

論叢

維新前後の開化思想……………經濟學博士 本庄榮治郎
限界生産力説と勢力の問題……………文學博士 高田保馬

時論

非常時局下に於ける日支の態勢……………經濟學博士 石川興二

研究

販路説の過剩投資説への發展……………經濟學士 青山秀夫
理想型の理論……………經濟學士 出口勇藏

アウグスチヌスの共同體思想……………經濟學士 澤崎堅造

說苑

蒙疆の人口と農業……………經濟學士 菊田太郎
國民經濟的概念と經營經濟的概念……………經濟學士 尾上忠雄
支那に於ける理想郷思想……………經濟學士 穂積文雄

附錄

彙報

外國雜誌論題

支那に於ける理想郷思想

穂積文雄

西洋經濟思想史を繙くと理想郷物語がでて来る。古くはプラトンの『共和國』より近くはモリスの『無可有郷便り』に至るまで、數へ來れば人口に膾炙せるもののみでも十指に餘る。

しかし考へてみれば、人間が現状にあまんとせず、より高きものへの憧憬、より善きものへの志向を有するかぎり、そしてそれを何らかの方法によりて満たさむとするかぎり、そこに理想郷物語の生れるのはあたりまへであると云へよう。そして、そう考へられるならば、理想郷物語は、かならずしも西洋人の頭のみ宿るべきものではなく、東洋人の頭にも浮べられなかつたはずはないであらうと思はれる。いまそう云ふふう
に思考してそれを探索してみると、われわれは支那に

5) 是等の問題の解決の方向に就ては、蟻川教授、經營學素描（經營と經濟第三卷 P. 21以下）參照

於ても幾多の理想郷物語を見出すことができるように思ふ。

以下、私はしばらくそれら支那に生れた理想郷物語に就いて考察を試みるであらう。

二

支那思想界に於ける輝ける存在であり、光芒燦として萬世に映ゆる大聖孔子は、また理想郷物語の優れたる作者でもあるようである。しからば、彼の理想郷物語はどこにどう説かれてゐるかと言へば、それは禮記、禮運篇の大同の説に於て見出される。曰く、

大道之行也。天下爲公。選賢與能。講信修睦。故人
不獨親其親。不獨子其子。使老有所終。壯有所用。
幼有所長。矜寡孤獨廢疾者。皆有所養。男有分。
女有歸。貨惡其棄於地也。不必藏於己。力惡其不出
於身也。不必爲己。是故謀閉而不興。盜竊亂賊而不
作。故外戶而不閉。是謂大同。

そして孔子によれば右の大道の行はれる社會が理想

で、そこでは人々天下を公と爲し、私を營まぬから禮の必要もないのであるが、如何せん現實の社會は大道既に隠れて小康の世と化し、そこでは人々私を先にする故禮を以て教へねばならぬと説かれる。だからこの大同の社會は實に孔子自らそれが理想郷であることを認めて居られると云つてよいものと思はれる。

しかし、理想郷たる大同の世であれば道を説くに及ばぬが、世は小康である故に道を説かねばならぬとする思想は、即ち、老子の有名な『大道廢有仁義』の思想に外ならぬ。そして老子の思想は孔子の思想のアンチテーゼとして成立したものと解せられる。

また、『人獨り其親を親とせず、獨り其子を子とせず』の思想は、即ち墨子に於ける、『視人之國若視其國。視人之家若視其家。視人之身若視其身。』と云ふに當り、それはまさに孔子の學統をつぐ孟子が排擊して『墨氏兼愛。は無父也。無父：是禽獸也。』と云ふところのものである。そして墨子はその時代出處不明で、司馬遷は『墨翟宋之大夫。善守禦。爲節用。或曰竝孔

九、禮記、禮運篇、第十、章句、
一、禮記、禮運篇、第十、章句、
二、禮記、禮運篇、第十、章句、
三、禮記、禮運篇、第十、章句、
四、禮記、禮運篇、第十、章句、

子時。或曰在其後。』と云ふが、孫詒讓は『與子思同時。生時當在其後。蓋生於周定王之初。卒於安王之末。』と云ひ、孔子よりは後と見るが妥當のように思はれる。

そうすると大同の思想は、孔子の後にいでたる學者の考へ方を含むことになる。そう云ふふうで、これは後世の僞作とせられる。それでこの理想郷物語は、孔子の思想とするよりも禮記禮運篇に見出される思想と云ふ方が無難であるとせねばならぬ。

三

孔子は周末王道漸く微かにして霸道徒らに蔓るを慨し、これを匡救して先王至美の治にかへさむとして仁義を説くのであるが、老子は前述の如く『大道廢有仁義』と云ひ、仁義を以て人爲と爲し、須らく仁義を棄てて大道に就き、宜しく人爲を去りて自然に歸へれと叫び、はるかに古代村落共同體の無爲の治を慕ふものごとく、小國寡民を謳歌して曰く、

小國寡民。使有什伯之器而不用。使民重死而不遠徙。

支那に於ける理想郷思想

雖有舟輿。無所乘之。雖有甲兵。無所陳之。使人復結繩而用之。甘其食。美其服。安其居。樂其俗。鄰國相望。雞犬之聲相聞。民至老死。不相往來。

しかるにそれは、司馬遷が貨殖列傳の冒頭に於て、『必用此爲務。輒近世。塗民耳目。則幾無行矣。』と喝破してゐるところであるによりても、それがつひに一の理想論に終り、從てそれが一の理想郷物語に外ならぬことがわかると思ふ。

ところで、老子のこの理想郷物語に於て私の興味深く感ずることは、それが太古村落共同體時代を慕ふ點に於て復古思想であり、そしてその時代を無爲無飾でそれ故に黃金時代と爲して自然に歸へれと叫ぶことに於て、文明を以て人類の墮落となし、自然に歸へれと叫ぶルソーと相通するものあるを見るときに、人類原始の状態を以て鬭争状態と見るトマス・ホッブスや荀子とまさに對蹠的立場に立つことである。

しかし右の老子の理想郷は記述あまりに簡素であるが、いまそれを發展せしむると、『君主も無く政治も

5) 司馬遷、史記七十四、孟子荀卿列傳第十四、
6) 孫詒讓、墨子間詁、序、
7) 老子道經、下編、八十章、
8) 司馬遷、史記一百二十九、貨殖列傳第六十九、

無く、從て戦争も無く刑罰も無く、課税も無く交通も無き人類の自然状態を想定し、現在の社會をここに復歸せしめんとする』⁹⁾ 鮑生の理想郷が出て来る。曰く

曩古之世。無君無臣。穿井而飲。耕田而食。日出而作。日入而息。汎然不繫。恢爾自得。不競不營。無榮無辱。山無蹊徑。澤無舟梁。川谷不通。則不相并兼。士聚不聚。則不相攻伐。是高巢不探。深澗不漚。鳳鸞棲息於庭宇。龍麟羣游於園池。飢虎可履。虺蛇可執。涉澤而鷗鳥不飛。入林而狐兔不驚。勢利不萌。禍亂不作。干戈不用。城池不設。萬物玄同。相忘於道。疫厲不流。民獲考終。純白在胸。機心不生。含哺而熙。鼓腹而游。其言不華。其行不飾。安得聚斂以奪民財。安得嚴刑以爲坑害。¹⁰⁾

四

同じく老子の理想郷の思想を發展せしむるものに列子がある。列子を讀むとわれわれはそこに多くの理想郷物語を見出すことができる。

今ここには中でも有名なものとして華胥氏の國、列姑射山、終北國及び古莽の國の記述をあげることにする。

華胥氏之國。在舛州之西台州之北。不知斯齊國幾千萬里。蓋非舟車足力之所及神游而已。其國無師長。自然而已。其民無嗜欲。自然而已。不知樂生。不知惡死。故無夭癆。不知親已。不知疏物。故無愛憎。不知背逆。不知向順。故無利害。都無所愛惜。都無所畏忌。入水不溺。入火不燒。斫撻無傷痛。指撻無疥癢。乘空如履實。寢虛若處牀。雲霧不礙其視。雷霆不亂其聽。美惡不滑其心。山谷不躓其步。神行而已。¹¹⁾

列姑射山。在海河洲中。山上有神人焉。吸風飲露。不食五穀。心如淵泉。形如處女。不偃不愛。仙聖爲之臣。不畏不怒。願聽爲之使。不施不惠。而物自足。不聚不斂。而已無愆。陰陽常調。日月常明。四時常若。風雨常均。字育常時。年穀常豐。而土無札傷。人無天惡。物無疵厲。鬼無靈響焉。¹²⁾

9) 小の馬士支社經濟思想、頁八八一八九 (東洋思潮、II、東洋思潮)

10) 列子、卷第二、黃帝第二、卷之四十八、詰鮑、

11) 列子、卷第二、

12) 列子、卷第二、

濱北海之北。不知距齊州幾千萬里。其國名曰終北。
不知際畔之所齊限。無風雨霜露。不生鳥獸蟲魚草木
之類。四方悉平。周以喬陟。當國之中有山。山名壺
領。狀若顛甄。頂有口。狀若員環。名曰滋穴。有水
湧出。名曰神瀆。臭過蘭椒。味過醪醴。一源分爲四
埒。注於山下。經營一國。亡不悉徧。土氣和。亡札
厲。人性婉而從物。不競不爭。柔心而弱骨。不驕不
忌。長幼僭居。不君不臣。男女襍游。不媒不聘。絲
水而居。不耕不稼。土氣溫適。不織不衣。百年而
死。不夭不病。其民孳阜亡數。有喜樂亡衰老哀苦。
其俗好聲相攜而迭謔。終日不輟音。饑倦則飲神瀆。
力志和平。過則醉。經旬乃醒。沐浴神瀆。膚色脂
澤。香氣經旬乃歇。¹³⁾
西極之南隅有國焉。不知境界之所接。名古莽之國。
陰陽之氣所不交。故寒暑亡辨。日月之光所不照。故
晝夜亡辨。其民不食不衣。而多眠。五旬一覺。以夢
中所爲者實。覺之所見者妄。¹⁴⁾
右の中に『水に入るも溺れず、火に入るも焼けず、

支那に於ける理想郷思想

斫撻するも傷痛無く、指撻するも癢癢無し』とか、
『人に天惡無し』とか、『織らず、衣ず、百年にして死
し、天せず病まず』とか、『衰老哀苦亡し』などある
を讀むときは、嘗てゴドウキンに關して『彼れの信す
る所によれば、人口の増加も亦た全く人間の智力によ
り左右され得るに至るものであつて、將來もし人口の
増加を必要とせざる時機が到來するならば、人々は生
殖を廢し、其の代り各人一同が何れも不死の長壽を保
つに至るべきである、と言ふのである。』¹⁵⁾とあるを讀ん
だことを想起して興趣深きものを感じざるを得ぬ。

五

以上禮記に見はれたる大同の世にしても、老子の謂
ふところの小國寡民にしても、なるほど理想郷物語に
はちがひないが、これを西洋に於けるプラトンの共和
國以下の理想郷物語に比すればあまりにも粗枝大葉に
失して日を同うして談ずるを得ぬ。

老子の理想郷はさらに發展せしめられはしたが、そ

13) 湯問篇第五、
14) 列子、卷第三、
15) 列子、卷第三、
河上肇博士、資本主義經濟學の史的發展、頁二三五、

の列子に見はれたるものは、あまりに架空に走せて理想郷物語と云はんよりはむしろ神僊談に近く、神仙傳の著者葛洪の抱朴子に見はれたるものは、かへつて稍具體性現實味を帯びるとは云ふものゝ、なほ西洋に於ける理想郷物語の記述の詳細なるに比すべくもない。

しからばそれは何故であらうか。しばらく私のみるところによれば、それは、これらの思想が生まれた當時の社會が、簡素な機構の上に成立して居たと云ふこともさることながら、また老子並にその流を汲む者の思想は勿論、大同の説といへども、既に眺めたように、その根底には無爲の治の思想が流れてゐるが、無爲の治の立場よりすれば社會は單純であれば、單純であるほど、それだけ理想的であり、従て理想の社會の記述は簡單である筈である、と解して大して謬らぬのではないかと思ふ。

しからば支那に於ては西洋に見られるような詳細を悉くせる理想郷物語はつひに見出すことができぬであらうかと云へば、かならずしもそうではないのであつ

て、少くともわれわれは班固によりてそれを與へられると思ふ。

班固は儒教の信奉者である。故に彼は周室至美の治を謳歌して世をその昔の狀態に回へすことを理想とする。従て班固はその狀態を説いて詳細を極め、至れり盡くせりの觀があるが、それはまさに儒教の創作せる傳説と稱せられるところに據るもので、従てその實在せしや否やは疑問の餘地あり、少くとも班固が説いて詳密を極むる井田の制の如き、これが實在は今日否定せられるに傾いてゐるのを見ても思ひ半ばに過ぐるものがあると思ふ。かりに周の盛時にはそのような狀態が實在したとしても、そのことはそれを説く班固の時代にそれが實在することにはならず、班固の時代にそれが實在せぬ以上は、班固の熱望が如何に強くとも、それは一箇の理想郷物語でなければならぬことになること云ふまでもないところに屬するが、思ふにそのような狀態は班固の時代に於ても實現の可能性は殆どなかつたと考へられ、少くとも結局それが實現しな

かつたのであるから、その可能性の論證の手がかりが
無いことだけは確であると云へるのではないかと思は
れる。だから班固の畫く周室至美の治の状態は一の理
想郷物語たらざるを得ぬと云ふことにならねばならぬ
と云へるかと思ふ。かくてそれを一箇の理想郷物語と
すれば、この理想郷物語こそは前述の如くまことに説
いて詳密を極め、且それは具體的且現實的である點に
於て上掲の諸物語と比較を絶して、直に西洋に於ける
理想郷物語と比肩し得ると爲すを憚らぬかと思はれ
る。

しからばそれはいかにそうあるか。

班固の理想郷物語はその撰するところの前漢書の貨
殖傳に於ても見出すことができるが、殊にその食貨志
に見出されるものに於て詳細を極むるから、ここにそ
れを引けば次のごとくである。曰く、

聖王域民築城郭以居之。制廬井以均之。開市肆以通
之。設庠序以教之。士農工商四民有業。學以居位曰
士。闢土殖穀曰農。作巧成器曰工。通財鬻貨曰商。

支那に於ける理想郷思想

聖王量能授事。四民陳力受職。故朝亡廢官。邑亡敖
民。地亡曠土。理民之道地著爲本。故必建步立晦正
其經界。六尺爲步。步百爲晦。晦百爲夫。夫三爲
屋。屋三爲井。井方一里是爲九夫。八家共之。各受
私田百晦公田十晦。是爲八百八十晦。餘二十晦。以
爲廬舍。出入相友。守望相助。疾病則救。民是以和
睦而教化齊同。力役生產可得而平也。民受田。上田
夫百晦。中田夫二百晦。下田夫三百晦。歲耕種者爲
不易上田。休一歲者爲一易中田。休二歲者爲再易下
田。三歲更耕之。自爰共處。農民戶人已受田。其家
衆男爲餘夫。亦以口受田如比。土工商家受田。五口
乃當農夫一人。此謂平土可以爲法者也。若山林藪澤
原陵淖鹵之地。各以肥磽多少爲差。有賦有稅。稅謂
公田什一及工商衡虞之入也。賦共車馬甲兵士徒之
役。充實府庫賜予之用。稅給郊社宗廟百神之祀。天
子奉養百官祿食庶事之費。民年二十受田。六十歸
田。七十以上上所養也。十歲以下上所長也。十一以
上上所強也。種穀必雜五種。以備災害。田中不得有

16) 拙稿、前漢書貨殖傳に見はれたる經濟思想、本誌、第四十九卷、第四號、頁、
七八一八〇、參照。

樹用妨五穀。力耕數耘收穫如寇盜之至。遷廬樹桑。菜茹有畦。瓜瓠果臝殖於疆易。雞豚狗彘毋失其時。女脩蠶織。則五十可以衣帛。七十可以食肉。在壑曰廬。在邑曰里。五家爲鄰。五鄰爲里。四里爲族。五族爲党。五党爲州。五州爲鄉。鄉萬二千五百戶也。鄰長位下士。自此以上稍登一級。至鄉而爲卿也。於里有序。而鄉有序。序以明教。庠則行禮。而視化焉。春令民畢出在塾。冬則畢入於邑。其詩曰。四之日舉止。同我婦子。饑彼南晦。又曰。十月蟋蟀。入我牀下。嗟我婦子。聿爲改歲。入此室處。所以順陰陽備寇賊習禮文也。春秋出民。里胥平且坐於右塾。鄰長坐於左塾。畢出然後歸。夕亦如之。入者必持薪樵。輕重相分。班白不提挈。冬民既入。婦人同巷。相從夜績。女工一月得四十五日。必相從者。所以省費燎火同巧拙而合習俗也。男女有不得其所者。因相與歌詠。各言其傷。是月餘子亦在于序室。八歲入小學。學六甲五方書計之事。始知室家長幼之節。十五入大學。學先聖禮樂。而知朝廷君臣之禮。其有秀異

者。移鄉學于庠序。庠序之異者。移國學于少學。諸侯歲貢。少學之異者。於天子學于大學。命曰造士。行同能偶則別之以射。然後爵命焉。孟春之月。羣居者將散。行人振木鐸徇于路。以采詩獻之大師。比其音律。以聞於天子。故曰。王者不窺牖戶而知天下。此先王制土處民富而教之之大略也。¹⁷⁾ 說き來り説き去るところ、言々句々悉く經國の大字にして、まことに一大偉觀たるを失はぬと思ふが、いまこれを要約すれば、即ち上に聖王在りて下萬民を撫育する、萬民は十農工商に分かれ、各その分を盡くす、但し、地著が理民の本とせられるが故に、土地は國有に屬し、これを各人に平等公平に配分し、各人をして平等の出發點に立たせる、働く能力ある者はまた働く義務ある者で、その生産の産果は互に交換して有無相通じ、長短相補ひ、以て經濟生活を全うする、そして人々は隣里郷黨を形成し、長幼序を正し、相互扶助、相親睦し、共同動作、よく能率を高め、又切磋琢磨、その向上を務めるとともに、他方庠序を設けて教

17) 班固、前漢書、二十四、食貨第四、上。

化を計るものであると爲すをえようか。

そして、この班固の『先王制土處民富而教之之大略也』として記述せるところのものは實に班固が詩書論語孟子等儒教の經典とせられるところのものより、上代至治の制を伺はしむるに足ると思はれるものを採用して、以てその時代を眼前に彷彿せしめむとするものであると考へられるのであるが、いま經濟史が個々の事實を探究検討するのは結局に於て、時代を脈搏つ具體的な且つ全面的な存在に於て眺め、そしてかゝる具體的な社會が變質して行く過程をまた具體的に、且つ全面的な關係に於て眺めるに在るものと解すべきであるとすれば、班固の右の記述に於て、われわれはまさに經濟史上の一大業績を見るべき筈であるが、班固に於ける資料の検討不充分と云ふ弱點のために、この大文章が遂に一の理想郷物語以外の何物でもない¹⁸⁾と云ふことを否定できぬのは、惜しみても餘りある氣がする。

六

以上私は支那に於ける理想郷物語に就いていささか伺ふところあつたのであるが、支那に於ける理想郷物語はかならずしも右につきるのではない。例へば墨子の兼愛交利の社會のごときは明に理想郷物語と解すべきであり、陶淵明の有名な『桃花源記』のごときも、稍趣を異にし、いささかわが五ヶの庄を幽幻化せるに似たるも、矢張また一の理想郷物語たるを失はぬと云へよう。さらに嘗て財部先生が紹介せられた¹⁸⁾ことのある白樂天の長詩朱陳村のごときも、これまた理想郷物語の範疇に屬せしめるをうるのではないかと思はれる。

尙、支那に於ける理想郷物語を伺つたわれわれは更に進んで東西理想郷物語の比較論に進むべきであるが、それは他の機會に譲り、本稿は一先づこのへんで筆を擱く。

(昭和十五年三月三十一日)

18) 財部靜治博士、支那の社會成層、木誌、第四十八卷、頁一八八、參照。